

セレンディティビティ

石渡（いしわた）さんの部屋は、存外男っぽい匂いがした。という語弊があるかもしれない。正確には、女っぽい匂いはそこまでしなかった。乾燥した、冬の日差しが埃をかぶってそのまま封じられたような匂いだ、と、言おうと思いながら私はお茶を用意する石渡さんの背中に話しかけられないままにいる。

中学生にしては破たんしていると思えるほど、部屋は広かった。真ん中より窓際に大きなグランドピアノが置いてあるのだから当然だけれども、ピアノがあることで部屋はより、その広さを強調しているようだった。クロゼットはなく、木目調の小さなカラーボックスが三つ綺麗に並んでいる。あとは折りたたまれた薄いピンク色の布団。漆黒のグランドピアノの横に布団がある光景を、私は、後にも先にも見たことがない。

突っ立ったままの私を後目に、石渡さんはピアノの傍に置いてあったキャスター付きのチェストテーブルをごろごろと動かして自分はピアノの椅子に腰を下ろした。カラーボックスと同じ明るい色の木目をしたチェストの上には、いつのまにかポットとガラスのティーカップが二つ、白磁のティーポットが一つ、ちゃんと乗っている。

「ティーコゼー、この間汚しちゃったのよ。紅茶こぼしちゃった」

「……なくても、あっても」

「格式ばったエゲレス人はああいうのにこだわるのよ。それに、あれがあった方が蒸らす時間が無駄にならないわ」

何がおかしいのか、石渡さんはくすくす笑った。

石渡さんと会ったのは、最近できた駅前の紅茶専門店だった。日曜日、何もすることがなかった私は、ふらふらと駅前の本屋に行き、ドーナツを食べ、紅茶が飲みたいと思ってその店に入った。ファストフードのドーナツは好きだけれど、油と砂糖がそのまま舌先に残る後味が好かない。

店内は静かなクラシックが流れていて、壁は真っ白、カウンターのようなところに袋詰めされた無数の紅茶と香りのサンプルが置いてあった。店員は若い女性一人だけで、白いブラウスに若葉色のエプロンをつけている。静かに何か、作業をしていた。石渡さんの後ろには金色に輝く、牛乳瓶をもっと寸胴にしたような缶が、天井まで区切られたスペースにずらりと並んでいた。出たい。入った瞬間にそうってしまう。何も、こんな本格的なお店に入ることはなかったのだった。スーパーに打っている、安いティーバッグでいい。引き返そうと思って振り向くと、そこに石渡さんがいた。石渡さんの周りだけ別世界、というよりも、私だけが別世界だったのだろうと思うほど、石渡さんは店の内装にすっぽり馴染んでしまうぐらい綺麗だった。

石渡さんは白い丸襟のついた、サテン地のワンピースを着ていた。店内の淡い光に、サテンの細かい生地がきらきらと輝く。紺色が虹色に見えた。対する私はさえないメガネをかけ、着古したトレーナーにジーンズという出で立ちで、クラシックよりも横断歩道の信号から流れるとおりゃんせの方がお似合いな格好だ。

「いらっしやいませ。ご試飲はいかがですか。ミルクティーにぴったりのアッサムロイヤルです」

女性の店員がカウンターの奥からやってきた。手には小さなお盆を持ち、その上には白い小さな紙コップが乗っている。石渡さんはごく当然のようにその細い指でコップをお盆から持ち上げ、三口で飲み下した。私はなかなか手が出ず、結局曖昧に首を振って断った。

「飲まないの」

「……いいの」

石渡さんは笑いもせず、怒りもせず、無表情のまま私の傍を通り過ぎ、ディスプレイされていたガラスのティーカップを眺め始める。私はそっと後ずさりしながら、ドアについたベルが鳴らないように慎重にノブに手をかけてゆっくろ店から出て行った。お店の外は大通りに面しているから、車の音がうるさく、クラシックなどとは無縁の世界だった。どこかから、とおりゃんせが聞こえてくる。

次の日、廊下ですれ違った人に腕をつかまれた。細い指が思いのほか強い力で私の腕にめり込む。図書館に返そうと思った本が二冊、腕から落ちて行った。その音に、他の生徒も私たちを見た。

「あ、」

「やっぱり同じ学校だった。紅茶好きなの？」

「え、いや、別に……」

「どこ行くの？ 図書館？」

下に落ちた本に張り付けられたバーコードをちらと見て、私の腕をつかんだままの石渡さんは尋ねた。私はそっと頷く。丹精な顔がぐいと近づいて、頬にある金色の産毛がさらりと光った。

「私も一緒に行く」

「え、」

「あなた、えーと、それ、なんて読むの。サカン？」

胸についた名札を、石渡さんはじっと見た。

「さぬき、です」

「さぬき、下は？」

「紅子（べにこ）、です」

「ねえ、知ってた、紅茶って紅色のお茶って書くのよ」

腕が圧迫から解放され、石渡さんはごく自然に床に散らばった本を拾った。さっきまで思いきり力をこめていた指は白く、しなやかに動いていた。

それから、クラスも違うのに石渡さんは休憩時間にはちょこちょこと私のところにやってきて、紅茶のハウツー本なんかを持ってきては時間いっぱいまで紅茶のことを話して帰っていく。なつかれる、という言葉がぴったりのように思った。他のクラスは結界が張ってあるようで入りづらいつらと感じる私とは違って、石渡さんはそんなもの全く感じないのだった。いつも席で本ばかり読んでいて根暗な私はクラスでも静かに過ごしていて、よくも悪くも誰の興味も集めなかったのに、石渡さんがクラスに入ってくるようになって、クラスの意識はそれとなく私の方へ集まっているのはよくわかった。

「ねえ、佐貫さん、石渡さんと友達なの？ 仲良しだよな？」

次の授業が体育のときの休憩だけは、さすがに石渡さんはやってこず、その代わりなのかクラスでも中心的存在の蛭名（えびな）さんが数人の女の子と一緒に私の席の目に座った。石渡さんが私のところに来ると決まって座るその席は、島内くんの席だった。石渡さんがそこにいるときは思いもしないのに、なぜか今、島内君には早く席に戻ってきてほしいと願う。

「……え、あ、ううん、そんな」

石渡さんもそうだけれど、蛭名さんのようなかわいくて自分とは接点のない女の子に話しかけられるとどうしていいのかぎこちなくなる。私は話していていいのか、変な風な声をしていないか、口は臭くないか、そんなことばかりが気になってしまって、一瞬で手のひらに汗をかいた。

「べにこ、なんて呼ばれてるのに？ ねえねえ、前から思ってたんだけど、紅子ってなんか古い名前だよな。なんで紅子って言うの？」

「し、知らない」

私の名付け親はおじいちゃんだった。私が生まれた日の朝に、綺麗な紅色の椿が庭に花をつけていたそうで、それを見て感動したおじいちゃんが紅子と名前を付けてくれた。それを言ったところで、きっと蛭名さんは笑うだろうから、私はそう言うしかない。それを言うので精いっぱいだった。

「じゃ、石渡さんがどういう人かも知らないね？」

「……う、」

一瞬教室がざわめいて、机ががたがたと揺れ、それに気づいたと同時に蛭名さんが痛い！ と叫びながら頭をかかえて前のめりになる。その後ろから現れたのは、白い肌を紅色に染めて息を荒くしている石渡さんだった。石渡さんが、蛭名さんの頭を思いきり叩いたのだった。いつのまにか席に戻ろうとしていたらしい島内くんも近くにいて、ただただ啞然とその光景を見つめていた。

その日の帰り、靴箱の並ぶ二年生の玄関に行くと、私のクラスの靴箱の前で石渡さんが待っていた。西日を集めるその場所は、白い床に光が反射して、石渡さんをシルエットだけにして浮かび上がらせていた。グレーのワンピースの制服さえ、真っ黒になっている。私を見つけた石渡さんは、とたとたと走り寄ってきた。また、細い指が私の腕をつかんだ。どきりとする。

「一緒に、帰らない？ 昨日、紅茶を買ってきたの。紅子と飲みたいと思って」

「え、でも、」

「私と一緒にいられない？」

「……ううん、大丈夫、ですけど」

「じゃあ、行こう。ねえ、今日、びっくりした？」

靴を履きかえて玄関を出たところで落ち合うと、夕日に照らされた石渡さんの髪の毛が茶色く透けた。

「……うん、びっくり……した……なんであんな」

「紅子がいじめられたんじゃないかって思ったの。何、話してたの」

「……私の名前がどうして紅子なのって聞かれて」

「ふうん、私も聞きたい。どうして？」

私は蛭名さんのときのように若干戸惑いながら、石渡さんには言ってもいいかと思い、由来を放した。石渡さんはふんふんと頷きながら聞いて、素敵ね、と一言言って笑った。ほっとして、きつと、蛭名さんには言えない、というようなことも言うと、言わなくて正解、私が殴っておいて正解だった、と石渡さんはなおも笑った。

「……授業、体育じゃなかったの？」

「さぼりよ。バスケで突き指でもしたら大変だし」

美しくて細い指はそうして保たれているのだった。私は小さい頃に何度か突き指をしていて、なおかつ小学生の頃に鉄棒から落ちて右手の小指を骨折しているの、変な風に曲がっている。生活に支障はないけれども、小指だけはうまく力が入らない。だから、石渡さんのようにしっかりと、誰かの腕をつかむことはできない。

「さあ、どうぞ」

そうして案内された部屋で、私と石渡さんは紅茶を飲んだ。ガラスのティーカップは、あの駅前の紅茶専門店で買ったのだそうだ。

「うーん、やっぱりコゼーないとなあ」

「……十分、おいしいと思う、けど」

「なんか、雰囲気でないでしょ」

石渡さんは一口二口飲んでは、いろんな角度から紅茶の色を見極める。少し薄い褐色は、陽の光で透けた石渡さんの髪の毛を思い出させた。ピアノ椅子から立ち上がりカップをチェストに置いて、石渡さんは私の方へ足を投げ出して寝転んだ。はらりとスカートがめくれあがり、肌色のシュミーズが見える。つい最近衣替えしたばかりで夏用のスカートとは違い透けないのに、そういうものをちゃんと履いているところが、どこことなく石渡さんらしいと思った。私は夏でも冬でも黒いスパッツしか履かない。

「……グランドピアノ、大きいね。音楽室のものより」

「当たり前よ。あんなのより何百倍もいい音が出るの」

「弾くの？」

「そうだよ」

馬鹿な質問をしている、と、自分でも思っている。石渡さんは有名人で、両親も音楽家で有名で、そんなことはきつとこの日本中で知っている人が多いのに、なぜか本人の口から聞きたいと思って尋ねた。石渡さんは寝転がったまま黙っていたけれど、不意にけらけら笑い出した。鈴が鳴るような声、というのは、こういう声なのだろう。寝返りを打って私の方を見た石渡さんは、顔を少し赤くして、潤んだ瞳をしている。思わずティーカップを落としそうになる。

「紅子は面白い。ピアノが飾り物だと思ってた？」

「ううん、知ってた、知ってたけど……」

「お店で紅子を見たときに、私、あ、この子いつも図書館にいる子だって思ったよ。ねえ、みんな、子どもっぽいでしょ。でも、紅子だけは本をたくさん読んでいて、きっと大人っぽいと思ったの」

大人っぽいのは石渡さんの方だ。私はあんな、白い丸襟のついたワンピースなんて持っていないし、スカートの下にシュミーズは履かない。紅茶はダストと呼ばれるような茶葉のティーバッグで十分だし、周りのクラスメートを子どもっぽいと思ったことはない。ピアノも弾けないし、音の良さあしもわからない。

「紅子、一緒にピアノ弾こう」

「私、弾けない。音符も読めない。石渡さんの演奏が聴きたい」

「読めることなんてどうでもいい。私が教えるから」

がぼりと起き上がり、私の腕を、またつかむ。あ、と声が漏れ、ガラスのティーカップが下に落ちた。幸い割れなかったが、温くなった紅茶が私のスカートを濡らす。

「あ、ああ」

「あら、ごめんなさい」

石渡さんの声はどこか楽しそうだった。私が立ち上がると、スカートの裾からぽたぽたと水滴が落ちた。

「おもしろいみたいになっちゃって。タオル持ってくるから」

結局、その日は、石渡さんとピアノを弾くことはなかった。

それから、石渡さんの家を訪れる回数が増えた。お互い部活には所属をしていなかったの、ほぼ毎日二人で帰って、三回に一回は石渡さんの家に行った。休日も、二人で遊んだ。というのはやっぱりちょっと語弊があつて、石渡さんの行きたい紅茶のお店や、紅茶がおいしいというカフェに私も連れて行ってもらった、という方が正しかったかもしれない。私は紅茶が特別好きなわけではなかったけれど、石渡さんが話してくれることや、貸してくれる本から紅茶の種類や知識をたくさん覚えた。輸入ショップで香辛料を買ってきて本格的なチャイを作ってみたり、ジャムを入れてフレーバーティーを作ってみたりもした。自分から何かしようと思うのは読書ぐらいだった私が、休日も外へ出ていくことを、両親が亡くなってから育ててくれた祖父母は驚きながらも喜んでいて。

ちなみに、例の一件以来、蛭名さんたちは私に何かを言うてくることはなかった。最初で最後の、蛭名さんとの接触だったと思う。蛭名さんや他のクラスメイトは、私をというよりも石渡さんを恐ろしがっているようだったけれども、そのおかげが私はまた、クラスの中では静かな存在になった。相変わらず教室の境界を破ってくる石渡さんにも、いつのまにか誰もが慣れていった。

石渡さんはよく、私たちは似ている、と話した。

夏休みに海を眺めに行った日の帰りの電車の中や、冬休みに初詣に一緒に行った帰りのバスの中や、そういうことを石渡さんが言うときは、大体寂しいんだということも、私は知っていた。石渡さんのご両親は死んではいないけれど、海外のオーケストラに所属しているために世界中を飛び回っていて、石渡さんは兄弟もいないから一人だった。長期の休みには一週間ほどご両親に会っていたみたいだけれど、いつも祖父母と一緒にいる私にとっては、一週間だけしか一緒にいないのは、短すぎる気がしていた。

中学三年の夏にまた、一週間だけご両親に会って帰ってきた石渡さんに、なぜ向こうで一緒に暮らさないの、と尋ねたとき、石渡さんは夏祭りを買ったりんご飴に悪戦苦闘しながら笑った。

「両親が日本人で、私も日本人なのに日本を知らないのはよくないって、統（おさむ）と紗子（さこ）が言ったの。大きくなってからはわからないけど、別に、私、ピアノで食べていこうなんてこれっぽっちも思っていないけど。紅子がいるし、私、日本でふつうに暮らしていけるし」

口の周りを飴の着色料で赤くして、石渡さんは笑った。一緒に歩くとき、石渡さんは決まって私の右腕をつかんでいて、その時少しだけ、その手に力が込められたのは、気のせいだと思う、きっと。

「でも、石渡さん、この間も賞をとってたじゃない。今度、海外の演奏会に行くんでしょ。力があるのに、なんで」

私の声にはあまり感情がなかった。そのことに、自分でも驚いた。どん、と背後で花火の音がして光が輝いて、周りの人は振り向いて歓声を上げたのに、私たちは反対方向へと歩いた。屋台の列が切れて、神社の境内がひっそりとたたずむ前に来て、やっと足を止める。



「紅子は最近、意地悪だね」

「そんなこと、ないよ」

「意地悪だよ。……私は、海外へは、行かない」

すっと手を放して、石渡さんは境内の賽銭箱の前にある石段に腰を下ろした。きれいなシフォン生地の水玉のワンピースが汚れないか心配している私をよそに、近づいたこちらの腕をぐいと石渡さんは引っ張って無理に座らせた。距離は思いのほか近く、石渡さんが息をわずかに吐くたびに、砂糖の甘い匂いがする。

「本当は、高校、紅子と一緒にいるところがよかったけど、紅子は頭がいいから無理だなあ。そのかわり、私服の高校に行くの。それで、思いっきりかわいい服を着てやる」

「いいと思う、石渡さん、お洒落だから」

「ねえ、今度、紅茶買うついでに服も見に行こう。選んであげる」

「いいよ、私、お洒落とか似合わないから」

石渡さんの手が、ショートパンツから出た私の太ももに触れた。細い指が、私の肌をなぞる。ぞくぞくと、得も言われぬ感覚が全身を包んで、鳥肌が立った。

「なんで？ 紅子はスタイルもいいし、メガネももっとレンズが薄いのにすればいいんだと思う。紅子はかわいいよ」

「ううん、そんなことない」

「なんで？ そんなことばかり言って」

石渡さんの手が、今度は私の頬を撫でた。見ているとすらりとして長い指や白い手のひらも、こうして肌で触れあうとざらついていて、そして、熱い。顔が近づいてくる。鼻がぶつかった。ふにやりと歪む、皮膚がわかる。

「キスって、難しいんだね」

メガネがずれ、私の視界は曇る。石渡さんのまっすぐな視線だけが、私を見ていた。甘い、味がした。

石渡さんとは高校生になってからも、カフェに行ったり紅茶を買いにいったけれど、中学生のときほどは頻繁に会うことは減った。神社の境内でのこと以来、私たちは必要以上の接触もなかった。私はほっとしたような寂しいような、複雑な気持ちだった。人よりは多くの本を読んできたつもりだったけれど、この気持ちを形容するような言葉は、何も見当たらなかった。愛しさとも、寂しさともつかない、複雑な、何か。

「統が、イギリスからファーストフラッシュを送ってくれたの。すごくいい茶葉だよ。目ん玉飛び出ちゃうぐらい高いんだから。まだ開けていなくて、ねえ、紅子こない？」

学年末のテストが終わってすぐ、石渡さんから電話があった。高校二年の春休みに入る前の日のことだった。結局、県内の音楽科のある高校へ進んだ石渡さんは海外へ行って、二か月近く会っていなかったのだから久しぶりに聞いた石渡さんの声が懐かしい。久しぶりなのだし、明日から春休みなら止まっていけばいい、と言われて、祖父母にもそう伝え、私は石渡さんの家へ向かった。

「久しぶり」

「うん」

相変わらず綺麗な石渡さんは、少し身長が伸びたようだった。中学生の頃は私と並ぶぐらいだったのに、今は瞳が上にある。お気に入りだと言っていたコーデュロイのスカートから覗く足も、すらりと長い。

「身長、伸びた？」

「うん、でも、大きくなりたくないな、大きいのは嫌じゃない？」

「……ううん、モデルさんみたいでいいんじゃない」

「そう？ 紅子がそう言うならそうね」

持って来たお菓子を床に並べ、石渡さんのお父さんが送ってくれたファーストフラッシュを飲んだ。今まで飲んだことがないほど、おいしい紅茶だった。

それから石渡さんは海外にいたときの話を話し、私は学校の授業の話をし、取るに足らないことに二人でくすくすと笑った。グランドピアノも一緒に引いた。良し悪しのわからない私でも、このピアノはすごく良い音が鳴るのだと思った。紅茶の知識は石渡さんのおかげですっかり覚えても、ピアノは全くダメだった。右手の小指が不恰好に浮いて使い物にならなくて、それでまた、二人で笑った。石渡さんに何か弾いてほしいというと、丁寧に断られてごまかされた。今まで一度たりとも、一人で弾いてくれたことはない。私は、その美しい指が鍵盤をたたくところを見たかったけれど、無理強いはできなかった。

「紅子と知り合えて、一緒に紅茶を飲んだり、ピアノを弾いたりできてよかった。友達になれてよかった」

夜になり、グランドピアノの傍に布団を敷いた。二組の布団を少し重ねるようにしているので、お互いの顔がすぐそばにある。メガネをはずしていても、石渡さんの顔はよく見えるほどの距離だ。電気を消したのに部屋が仄明るいのは、街路灯のせいのような感じだった。青みを帯びた光が部屋中を染めている。漆黒のグランドピアノさえ、青く見える。

「急に、どうしたの」

石渡さんの瞳は潤んでいて、初めて私がこの部屋に来たときと同じだった。

「……私、三年生になったらウィーンに行くことになったの。今回の遠征で、向こうの大学の先生が私を好いてくれて……九月から向こうの学校に通う。それまでは、統と紗子の世話になるの

」

「……ピアノで、食べていかないって、言ってたのに」

「……私、やっぱり、ピアノが好きだって気付いたの。あっちならもっと、私、自由に生きていけると、思って」

「行っちゃうの」

「行くわ」

「そう」

「止めないの？」

「止めないよ。石渡さんは、それだけの力があるから」

「……紅子は意地悪だね」

「……こういう話になると、いつもそれを言うね」

「だって、意地悪だから。……私、ピアノも好きだけど、それと同じぐらいに、紅子のことが好きなんだよ。私、だからずっと、向こうに行かないって思ってたけど、でも」

石渡さんの豊かな髪の毛がふわりと香った。半身を起き上がらせ、私に覆いかぶさるようにキスをしてくる。するりと布団の中に忍び込んできた石渡さんの指は当たり前のようにしなやかで長く、私の腕をつかむときよりもさらに強く、私の右手を握った。キスは長く、舌が入り込むのを必死で受け止めながら、息継ぎができず、私は固く目をつむる。

「好き」

石渡さんはさらに私にかぶさってくる。どうにか口を離して、咳き込みながら呼吸をする。石渡さんは私の不恰好に曲がった小指を自分の口に含んだ。愛おしそうにそれを吸っていて、私はぞくぞくとする。背筋が凍る、とも、快感を味わう、とも、違う、すべてを感じすぎてすべてを感じられなかった。極端に熱いものに触れると肌が冷たいものに触れたと錯覚するような感じだった。とにかく、すべての感情がごちゃ混ぜになって、ぼうっと、私の指を捕える石渡さんの指を見ていた。石渡さんの指は長く、美しいけれど、女っぽさはない。爪は短く切りそろえられていて、骨ばっている。それでも、私と連弾をするときのその指は美しく動き、私の下手な音を拾って返してくれた。紅茶を入れるときのその指はしなやかに動き、無数のアレンジティーやおいしいストレートティーを淹れてくれた。でも、女っぽさはない。

「好きなの」

私の指をくわえたまま、石渡さんは私を抱き寄せた。頬の産毛が相変わらずさらりと光る。私の体は硬直したまま、石渡さんのするようになってしまう。風呂上りに借りた、綿のパジャマのズボンが下ろされ、下着も下ろされ、素肌に布団がこすれる。するすると心もとない場所に、石渡さんの長くて節くれだった指が触れた。

「だっ……」

さすがに漏れた声に、石渡さんは頬を紅潮させて微笑む。

「紅子の顔、紅色だよ」

私の中に入ってきた石渡さんの指は、男の指をしていた。

早朝、寒さで目が覚めた。三月とはいえ、明け方はずいぶん冷える。私ははだけたパジャマを着なおして、自分の荷物を丁寧にカバンに入れて、パジャマの上からダウンジャケットを羽織って石渡さんの家を出た。すうっと冷えた空気は柔らかいようで残酷で、何度も鼻をすすった。何もかもが、嘘だったのなら、すべては楽なのにとすら思う。

三月の終わりの日の夜、石渡さんの家の前に立つと、かすかにピアノの音が漏れ聞こえてきた。チャイムを何度か押してもピアノの音は止むことがなく、やむなく玄関のドアのノブをひねる。鍵のかかっていないドアを抜け、三和土で靴を脱いだところで、この曲は二人で連弾をしていた曲なのだと思います。私が左手のパートをやって、石渡さんが右手のパートをやっていた。けれど、あのときはこんなにも力強く雄々しい演奏には一切ならなかった。曲にすら、聞こえなかった。この曲の、本当の姿はこうだったのだとなぜか落胆し、家具がすっかりなくなってしまった家の階段を上る。見慣れたドアを開けると、髪の毛がすっかり短くなって、黒いパーカーにカーゴパンツを履いた石渡さんが、無心にピアノを弾いていた。うすら寒い部屋の中で、石渡さんの周りだけが熱い。やっぱりあの人だけは、別世界なのだ。私は思わず泣きそうになる。

曲が終わっても石渡さんは手を浮かせたまま、顔をうつむけたまま、そこから動かない。グランドピアノの上にはティーカップが置いてあって、琥珀色の紅茶が入っていた。

「……明日、発つんでしょう」

「来て、くれないかと思った」

私の震え声を包むようなおらかな声だった。石渡さんはようやく動いて、私の方に向き直る。やっぱり綺麗だった。今の石渡さんは、女にも男にも見え、たぶんそれが、石渡さんの本当の、自由な姿、なのだと思う。

「……意地悪だよ、紅子は、本当に」

「……わからない」

ゆっくり近づいて、石渡さんの隣に座った。また、背が伸びたようだった。これだけ近くで見ると、咽喉仏が否が応でも目に入る。鍵盤に置かれた指の隣に、私も手を置く。私よりも、やっぱり、一関節分大きい指をしている。不恰好に曲がった小指を見て、石渡さんは笑う。

「小指が、好き。顔が好き。話す姿が好き。紅子を、図書館で見たときからきつと、あれ、ひとめぼれだったんだと思う。最初は小指が変な形してるって思って、ピアノ弾けないだろうなって思って、その次は、すごく落ちていて話すんだなって思って……私、こんなだけけど、ねえ、こんなだけどき、人をちゃんと好きになるんだよ。わかんないけど、男として紅子が好きなのか、女として紅子を好きなのかわかんないけど、でもね、紅子のことは、特別に、特別に好きなんだよ」

知ってる？ と、石渡さんは続けた。

「フランスのおまじないでね、朝に紅茶をいれたときにカップに泡がたくさんたったとき、恋が近いうちに始まるってサインなの。紅子に、紅茶屋さんであったときの朝の紅茶がすごく、泡が立ったのよ。初めて喋ったの、紅茶屋さんだったし、運命だって、思った、思ったのになあ」

石渡さんが違う曲を弾き始めた。なんという曲なのかよくわからなかったけれど、石渡さんの指が縦横無尽に動き回るのは美しかった。ピアノを弾く人の指はすらりと長く、節くれだってもおらず、勝手なイメージで女らしい指をしているのだと思っていたけれど、石渡さんの指はそうではない。すらりと長いし色も白いけれど、節くれだっているし爪も小さくて男の人の手をして

いる。それでも、私はいつだって、石渡さんの指は美しいと思っていた。

「どんどん成長しちゃうの。体が、男になっていく。女の子みたいに生きていたいのに、体は男になってくの。なんでだろう。女の子になりたかった、けど、きっと私は紅子を抱きたいと思うの、それはきっと、男の気持ちだわ」

石渡さんは有名人だった。可愛くて、綺麗で、ピアノがうまくて、そして、本当は、男の子だっていうことも、有名だった。知らない人はいない。

紅茶のお店で初めて石渡さんを見たときに、こんなに可愛い子が男の子だなんて信じられなかった、けれど、蛭名さんの態度や、私に触れてくる力や、そういうものが男の子を感じさせた。いつのまにか私より大きくなった身長や、短くなったスカートや、節くれだった指や、その瞳や、私を、思う、心や、そういうものが。

「……私は、よくわからない、石渡さんは女の子として私を好きなのか、男の子として私を好きなのか」

「うん。……きっと、今日、紅子は来てくれると思って、髪の毛を切って待ってた。私が持っている服の中でも、男の子みたいな服も着てみた。でも、きっと、紅子の心は動かないんだろうなあ。ねえ、知ってた、紅子、私が海外の話をする少し怒ったような顔になるの。私、きっと少し寂しいのかなって思って嬉しかったの。でも、そうじゃないのかな。わかんないのね」

話しながら、石渡さんの指は動く。強弱をつけて、跳ねたり沈んだりして、力強い音を奏でる。体の芯がじんと熱くなる。鼻の奥がつんと痛くなる。

「……指が男らしくなるたびに、でも、ピアノは喜んでいるような気がするのが悔しい。紅子には、聞かせたくなかった、私の音。こんな、男っぽい音。でも、私はきつと、心は女でも、男なんだ」

石渡さんの瞳から涙が一粒落ち、二粒落ち、鍵盤を濡らした。ティーカップがわずかに音を立てる。

「こんなにも、紅子が好きだもの、でも」

音の連なりが早くなる。明るい曲だったのに、いつのまにか心を打ちのめすような悲しい曲になる。複雑な気持ちだ。私ときつと同じ、気持ちを、石渡さんも持っていたのだ。愛しいような、悲しいような、ごちゃまぜの気持ちを。私は気付いていた。石渡さんが私の腕を廊下でつかんだとき、蛸名さんをたたいたとき、バスの中、電車の中、夏祭りの境内で、紅茶を飲みながら、連弾をしながら、布団の中で抱かれながら、彼が、彼女が、私を好いているということ。石渡さんの葛藤。

「最後まで、紅子は、私のこと好きなんて一言も言ってくれなかったね」

石渡さんは曖昧に笑って、声をあげて泣いた。

そして気付く、私の気持ちの正体。曲が終わる。

「罪悪感、だっていうんですか。そうしたら本当に紅子さん、」

「うん、ずるいよね。意地悪っていうか、卑怯だったと思う」

周（あまね）くんはうーん、とうなった。静かな海辺のカフェに合わせて、彼の声はいつもの三十分の一ぐらいの大きさだった。思わず笑えてきて、くすくすと笑うと周くんは呆れたようにテーブルに伸びる。

「ていうか紅子さん、こういうのはさ、立ち飲み屋とかで聞いたかったですよ、八海山とか煽りながらさこう、なんていうんです」

「そうだよねえ」

「ところで、その石渡さんはどうしてるんですか。俺、そういう音楽方面には全く疎いからわかんなんですけど」

周くんは仕事帰りに立ち寄ったオカマバーの店員さんで、彼自体はオカマでもゲイでもないらしい。何度か話すたびに仲良くなって、キスも一度だけしたけれどおかしくなって笑えて、それ以上発展することはなかった。

あれ以来――石渡さんと触れ合ってから、私は誰とも付き合うこともなかった。数人、体だけの関係を持った男性もいたし、女性もいた。けれども、結局合わなくなって、続く人はいなかった。

「ねえ、今、もし石渡さんに会ったとしたら、どうする？」

「どうしようかなあ。でも、びっくりするかも、あの子。私、もっとまじめだったし、貞操固かったし」

「あはは、今じゃセフレ探せばっかりなのに」

「ちゃんと恋人探してるよ」

周くんの指がこちらに伸びているのをいいことにそっと触れる。石渡さんの指に少し似ていて



、だからきっと、周くんとは話が合っているのかもしれないと思った。なんだかんだとくだらない話をしていると、頼んでいたホットサンドとコーヒーと紅茶が運ばれてくる。

「ホットサンドにはコーヒーでしょ」

「ここの紅茶、おいしいんだよ。これはセイロン。紅茶のシャンパンって言われてんの。渋みもなく、飲みやすいの。なんにでもあうんだから」

「あーそー」

カップに紅茶を注ぐと、さして勢いよく入れたわけでもないのにカップの淵に細かい泡がぷくぷくと浮かんだ。思わず頬が緩む。

「ねえ、知ってる？ フランスのおまじないで、紅茶をカップに注いだときに泡が立つと、近いうちに恋のチャンスがあるんだって」

「あーそうなの？ でも俺とじゃないよね」

「そうだね。それはもう、当然だよ」

「うわ、そこまで言われるとそれはムカつくんだけど……朝から連れてきておいて、そういう可能性もないってのもなあ」

「だって、キスもろくにできなかつたじゃない」

「そうだけども、俺、紅子さん結構好きなんだけどなあ。ていうか、そもそもなんでこのカフェなの」

「初めて、石渡さんと遠くに来たのがこのカフェだったの」

「……結局、罪悪感だけだったの、石渡さんに対してはさ。気持ちわかっていながらも、答えなかつたんでしょ」

店内に流れるボサノヴァが、ドアにつけられたカウベルの音で遮られる。ドアの方を向いて座る私の顔が笑顔になると、背を向けて座っていた周くんが振り向き、そして驚いた顔で私を見直した。ゆっくり口を開く。

「私、あの人の指がどんなのだったって、美しいと思うし、好きだと思う、と、思うんだよね。結局、それが事実なんだね」

石渡さんはその美しい手を、私に向けて振った。

<END>